

〔論文〕

『ソリロクィア』における魂の不死性論証の不明瞭さについて*

文 禎 顯

名古屋学院大学経済学部

要 旨

アウグスティヌスの初期著作である『ソリロクィア』における魂の不死性に関する論証は、ギリシャ哲学的要素とキリスト教的要素が複雑に絡み合っていることによって、いくつかの不明瞭な点が浮き彫りになる。この不明瞭な点を通してわれわれは当時のアウグスティヌス自身の独創的な試みと、彼の思想が発展していく過程の一部を垣間見ることができる。

キーワード：ソリロクィア，魂，不死性

A Study on Ambiguity in Arguments for the Soul's Immortality in Soliloquia

Jongho MOON

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

* 本論文は、2013年9月11日日本基督教学会第61回学術大会で発表した「魂の不滅 (immortalitas animae) に関するアウグスティヌス思想の不明瞭さについて」に手を加えたものである。

発行日 2017年1月31日

1. はじめに

アウグスティヌスは386年8月の終わりにミラノで回心した後、同年9月からミラノ近郊のカシキアクムの山荘で小グループ隠棲生活をする。そこで『アカデミア派批判』、『至福の生』、『秩序』といった「カシキアクム対話篇」と呼ばれる書物を著す。そしてこの時期の最後の作品である『ソリロクィア¹⁾』(soliloquia 386-387)を書き始める²⁾。そして、これらの作品を通して新プラトン主義者としてキリスト者になったアウグスティヌスは、新たな真理探究として、悪の問題、三位一体の意味、真理を観想するように訓練された魂の能力、魂の不死性などについて自身の思想を発展させている。

本研究はこれらの作品の中で『ソリロクィア』を取り上げ、特に第2巻を中心に論じられる魂の不死性について考察する。『ソリロクィア』における魂の不死性論証は、O'Connellの指摘のように、アウグスティヌスにとって魂の不滅に関する筋の通った論証を発展させるのに少なくともある程度成功的な試みだったかもしれない³⁾。たとえ『ソリロクィア』の魂の不死性論証においてギリシャ哲学的要素とキリスト教的要素が複雑に絡み合っている部分があるとしても、彼の魂の不死性論証は一定の成功を成し遂げているかのように見える。しかし若い頃の自身の思想を省みる老年のアウグスティヌスは、『再考録』(Retractationes 426-7) 第1巻4章1節で『ソリロクィア』そのものが不完全のままであり(imperfectum remansit)、その中の魂の不死性の議論は完成されていない(non peragitur)⁴⁾と告白する⁵⁾。

-
- 1) B. Stock 2010, *Augustine's inner dialogue: the philosophical soliloquy in late Antiquity*, New York: Cambridge University Press, pp. 63-64. soliloquium という語は、アウグスティヌスによる新造語であり、形容詞の solus (一人の) と動詞の loqui (語る) から成っている。アウグスティヌス以前の古代の作家の中で、物語と内的対話のコンビネーションを用いていた人は誰もいないといわれる。このコンビネーションは『ソリロクィア』をはじめとして、いくつかの初期作品と『告白録』にも現れる。これはアウグスティヌスが西洋の自伝的作品に決定的な新しい方向性を与えた者と評価される理由の一つである。そして哲学的背景から見られるように、『ソリロクィア』は内的対話に対するプラトンやキケロなどの古代作品と、デカルトやパスカルなどの近代の作品の間で重要なつながりとしての働きをされるといわれている。『ソリロクィア』のジャンルについて上記の資料の63頁から76頁を参考にせよ。
 - 2) 387年4月24日から25日にかけての夜、アウグスティヌスはミラノでアデオダトゥスとアリピウスとともにアンブロシウスから洗礼を受けるためにカシキアクムの山荘からミラノに帰るが、そこで『ソリロクィア』を書き終える。
 - 3) R. J. O'Connell 1968, *St. Augustine's early theory of man, A. D. 386-391*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, p. 113.
 - 4) Retractationes I, 4, 1 (CCSL42) Sed imperfectum remansit, ita tamen ut in primo libro quaereretur et utcumque appareret, qualis esse debeat qui uult percipere sapientiam, quae utique non sensu corporis sed mente percipitur, et quadam ratiocinatione in libri fine colligitur, ea quae uere sunt esse immortalia. In secundo autem de immortalitate animae diu res agitur et non peragitur.
 - 5) 引き続き、アウグスティヌスは、『再考録』第1巻4章2節から4節にかけてなぜ『ソリロクィア』が不完全なのか、その理由についていくつかの例を挙げ、修正を行う。第一、信仰によって清められていない者たちにとって真なるものとは何なのか、知ることは何なのかということが定義されていないこと。第二、聖書の新し

本研究は、『再考録』でアウグスティヌスが認めた『ソリロクィア』における魂の不死性議論の不完全な状態、言い換えれば魂の不死性議論の不明瞭さを明らかにすることを試みる。

2. 真理が存在する場所としての魂とその不滅の生

まず『ソリロクィア』においてアウグスティヌスが魂の不死性を明らかにする前段階として、魂をどのようにとらえているかについて検討することから始めよう。

アウグスティヌスは、『ソリロクィア』の冒頭において、自分が愛し、従い、求めるのは、無から世界を創造し人間をも造った神であり、この神が自身を内的に神に向きを変えてくれることを祈りながら⁶⁾、自己と自己の「理性⁷⁾」との対話形式の探究に取り組む。この対話形式の探究の目的は、この作品全体のテーマとして知られている「神と魂を知りたい⁸⁾」という願望の中に集約されているといえる。アウグスティヌスにとり、神と魂を知り、認識するための前提になるのは、真理を把握し、認識しなければならないことである。なぜなら神と魂は真理を通して認識されるからである。「理性：だからまずそれ（真理）が認識されなければならないし、それ（真理）を通してそれら（神と魂）が認識されうるのである⁹⁾。」

すると真理はどのように認識されるのであろうか。アウグスティヌスは真理 (veritas) を真なるもの (verum) との関係において認識しようとする (I, 15, 27)。この二つは別のものとして、真理は真なるものの存在の根拠であり、真なるものは真理によって存在させられる (I, 15, 27)。言い換えれば、真理は神的存在で、真なるものはその被造物だということである。真理と真なるものこのような関係においては、真理が存在しないのなら真なるものは存在しえない。そしてこのような関係においては、真なるものが滅びるとしても真理は滅びることはないといえる (I, 15, 28)。もし滅びな

い天と地を知らない感覚を「死すべき感覚」として表記すべきだったこと (I, 1, 3)。第三、知恵との結合に至る道が一つのみではないという表現は避けられるべきだったこと。第四、すべての身体を否定するポルフェリオスの思想のように見られる表現を避けるべきだったこと。第五、忘却の中に埋もれている知識を学ぶことによって掘り返しているという表現はプラトンの想起説のように見られるため、拒否するということである。

- 6) H. Chadwick 2009, *Augustine of Hippo: a life*, New York: Oxford University Press, p. 36. H. Chadwick は『ソリロクィア』第1巻の冒頭の長文の祈りは内容的にプラトンの要素とキリスト教的な要素が不可分離的に混合されている形式であり、これは『告白録』の形式と直接的な関連があるという。実は『告白録』は『ソリロクィア』を修正して深みを持たせたものであるといわれている。(H. チャドウィック著・金子晴勇訳 1993, 『アウグスティヌス』, 教文館, 113頁。)
- 7) 『ソリロクィア』第1巻1章1節でアウグスティヌスは、突然に自身に話しかけてきた者を理性(ratio)と名付け、それが自分自身なのか、自分の外の何者なのか、自分の内の何者なのか知らないといい、自分と理性との対話に取り組む。一般的にこの理性はアウグスティヌス自身の理性であるといわれる。ところが J. A. Mourant のようにこの理性を神と同一視する場合もある。(J. A. Mourant 1969, *Augustine on immortality*, Villanova, Pa.: Villanova University, 127p の注の3.)
- 8) Soliloquia I, 2, 7 (BA5) A. -Deum et animam scire cupio.
- 9) Soliloquia I, 15, 27 (BA5) R. -Ergo prius ipsa cognoscenda est, per quam possunt illa cognosci.

い真理が存在するとしたら、どこに存在するのであろうか。新プラトン主義者のアウグスティヌスにとって、真理は存在することは確かであるが、物体 (corpus) でないため、場所の中 (in loco) には存在しないことになる (I, 15, 29)。そして可死的な事物の中 (in rebus mortalibus) にも存在しないことも確実である (I, 15, 29)。したがって真理が存在するところは、非場所的で、不死的なもの (res immortales) でなければならなくなる (I, 15, 29)。そして必然的に真理がその中に存在する非場所的で不死的なものは、真なるものでなければならない (I, 15, 29)。

ここで上記で述べた神的真理とその被造物である真なるものとの関係について簡単にまとめておいて次の議論に進もう。要するに、非物体的で滅びない真理は、被造された真なるものの存在の原因である。そしてこの真理は、空間的場所においてでもなく、可死的なもののうちでもなく、非空間的で、不死的で、真なるものうちに存在することになるということである。アウグスティヌスは真理の居場所の条件を揃えているものとして魂を取り上げている。

彼は魂の不死性論証が本格的に始まる第2巻の冒頭で、神の居場所としての魂について最初に知りたいのは、魂が不死なるものかどうかということだと表明し (II, 1, 1)、魂が不滅であるなら、その不滅の生の意味や目的は何なのかについて探究を深めていく。アウグスティヌスにとって、魂の不滅の生とは、ただ存在すること (esse) にとどまるものではない。不滅の生において存在することは生きること (vivere) でなければならない。そして不滅の生において生きることとは真理を知り (scire) 理解する (intellegere) ためであり、それが至福の生なのである。したがって不滅の生において存在すること、生きること、真理を知解することにつながらなければならない。「しかし君は存在するのは生きるためであり、生きるのは知解するためである¹⁰⁾。」

以上のように、『ソリロキア』において魂は滅びない神的真理の居場所として非場所的で不死的で真なるものであり、魂の不滅の生はこの真理を知解することを目的とするということがわかったが、魂を居場所とする真理を知解するというのはどのようなことなのかは、次の第3章で魂の不死性論証において明らかになるであろう。

3. 魂 (知性) と真理を通した魂の不滅性に関する論証

アウグスティヌスは、魂における存在すること、生きること、知解すること、この三つがつねに存続することについて知りたいと探究の意欲を表しながら、魂の不死性について具体的に論証していく (II, 1, 1)。そして次の二つの方法で魂の不死性について論ずる。一つは感覚と虚偽の関係を通して¹¹⁾であるが、それは失敗に終わる。もう一つは真なるものと魂の知性の関係を通してである。この章では後者の議論を紹介する。

アウグスティヌスは、感覚ではなく、知性によって把握できる真なるもの¹²⁾と魂との関係を通して

10) Soliloquia II, 1, 1 (BA5) sed esse ut vivas, vivere ut intellegas.

11) 感覚と虚偽を通した魂の不滅性論証に関しては『ソリロキア』II, 3, 3～4を参考にせよ。

12) B. Dobell 2009, *Augustine's intellectual conversion: the journey from platonism to Christianity*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 147-151. 真理と真なるもの関係は『ソリロキア』の魂の不滅性に関する

魂の不滅について論証する。

感覚ではなく、知性によって把握できる真なるものとして学問¹³⁾ (disciplina) が取り上げられる。神が英知的存在であるように、学知(学問の論証) (illa disciplinarum spectamina) も知性によって把握される英知的なものである(1.8.15)。次の一つの例を想像してみることによって、学知は感覚(五感)ではなく知性を通して把握されるものであることがわかる。たとえば幾何学において直径1ミリの極小の円の中に、間隔がとて狭い二つの平行線を円周から中心にむかって引いたとすれば、理論的にその二つの線の間には中心を除いて決して接触することなしに、無数の線が引かれることが可能である。さらに無数の線の間には円を描くことが可能である。アウグスティヌスによると、このような学知が感覚(五感)¹⁴⁾ではなく、知性によって把握される英知的なものなのである(II, 20, 35)。

アウグスティヌスは、知性によって理解される学問を真の学問というが(II, 11, 19)、真の学問である理由は、それをして真の学問たらしめる根拠である真理そのものによって、真なるものになるためであり(II, 11, 21)、真理自体の光によって学問が照らされ、理解されるからである(I, 8, 15)。

アウグスティヌスにとり、知性によって理解される学問的真理と魂は、樹とその形や姿の不可分離的關係、太陽とその光の不可分離的關係のように、不可分離的關係にある。樹からその形と姿を、そして太陽からその光を切り離すことができないように、魂という基体(subiectum)から学問的真理を別々に分離させることはできない(II, 12, 22)。

この不可分離的關係から考えると、基体そのものが存続しないとすれば、基体に不可分離的に存在するものも存続することはできなく(II, 12, 22)、逆に基体に不可分離的に存在するものがつねに存

る論証の過程において長く議論されるが、Brian Dobellによると、『ソリロキア』はアウグスティヌスが真理と真なるものを区分する本質的な面について真剣に取り組んだ最初の作品であるという。彼は『ソリロキア』第1巻(I, 15, 28)における真理と真なるものをそれぞれ滅びえない知性的世界と滅びうる感覚的世界として理解する。『ソリロキア』第1巻の真理と真なるものに関する議論は、第2巻の神(真理)の本性と魂(真なるもの)の本性を明らかにするように意図されている。そして彼はこの真なるものを、『告白録』(VII, 2, 17)の神によって存在をもつ可変的なもの、質料が $\mu\eta\ \text{ov}(\text{non est})$ であると主張するプロティノスの思想(『エネアデス』2.4.16.3, 3.6.7.11-13.)に影響された『至福の生』8の nihil と aliquid とに関連付ける。さらにこの議論を通して彼はアウグスティヌスによる可変的なもの(真なるもの)の存在論的位置づけの不明瞭さに注目する。

13) アウグスティヌスの時代、学問(disciplina)、すなわち自由学芸(disciplinae liberales)には三学科(文法学、修辞学、弁証論)と四学科(幾何学、算数学、天文学、音楽)があったと知られている(清水正照訳1971、『アウグスティヌス著作集1』、教文館、457頁の注24を参考せよ)。アウグスティヌスは『ソリロキア』において学問がつねに存在する真理であり、それ自身によって、それ自身において真の真理であるということによって、神的真理とほとんど同じような意味として用いている(II, 11, 21; II, 13, 24)。そのため人間は魂の中にあるその学問(真理)に向かわなければならないことになる。しかし『再考録』(I, 3, 2)で多くの聖者は自由学芸を知らず、それを知っているある人たちは聖なる者ではないといい、その自由学芸に重きを置いたこと、つまり自由学芸が魂の不死と至福の生につながる真理探究に必要なものであると強調したこと(『秩序』I, 8, 24)に対して反省する。

14) アウグスティヌスによると、感覚はまるで船のようなものとして目指すところへ運んでくれるが、感覚によって幾何学(目指すところ)を理解することはできないという(I, 4, 9)。

在し続けるならば、基体自体もつねに存在し続けることは必然的になるといえる (II, 13, 24)。このように基体とその中に存在するものの中で一方がつねに存続するならば、他方も必然的に存続するということは、その不可分離の関係から推論される論理的帰結である。この推論からすると、魂を基体とし、その中に存在する学問的真理がつねに存在するというならば、基体である魂もまたつねに存在することになる¹⁵⁾。

実はアウグスティヌスにとって学問的真理はつねにとどまる真理 (veritas) である。学問的真理がつねにとどまるがゆえ、その基体である魂はつねにとどまり、不滅な存在になる¹⁶⁾。彼は、どんな学問であれそれが人間の知性によって保持されている真理であるなら、それは基体である魂の中に分離し難く存在し滅びえない真理であり、そのため、学問の基体である魂の永遠の生について疑わない¹⁷⁾という (II, 19, 33)。「もし滅びえない真理が魂の中にも存在すると論証されるならば、魂は不死であることが信じられるわけだ。」(II, 18, 32 *Animus autem immortalis creditur, si veritas quae interire non potest, etiam in illo esse probatur.*)

このように魂と学問的真理の不可分離的な関係から魂の不滅性が論証される。実は魂と不可分離的な関係にある学問的真理は、魂によって本来保持されているもの (II, 20, 30)、つまり先天的に内なる人間の忘却に埋もれているものであり、学びを通して掘り出さなければならないものである。したがって、魂には自身のうちにあるその真理を見つけ出さなければならない課題があるのである。この課題は次のように述べられる。第一、まず学問を通して滅びない真理を宿している魂が自ら滅びゆくものではないと自覚しつつ、自分に立ち返らなければならない。第二、そして魂の知性によって保たれている学問的真理、すなわち内なる人間の忘却に埋もれている学問的真理を学ぶことによって掘り出さなければならない¹⁸⁾。第三、また虚偽に注意しながら、自身が掘り出した学問的真理の中で学知の基

15) P. De Labriolle 1949, *Les Soliloques* (Bibliothèque Augustinienne 1), Paris: Desclée de Brouwer, pp. 18–20. P. De Labriolleによると、学問 (真理) の不死性とその基体である魂の不死性について、魂のみが知性的、すなわち理性を享受するから、真理と本質的に関連付けられる。そのため真理の永遠性は真理の住まいであるこの魂の永遠性を要請するようになる。そしてこのような真理と魂の不死性の関係は、不死性の原因的性質を有している真理とその性質を摂取する魂の不死性について語るプラトン (『パイドン』84a-b) の思想と関連付けられ、さらには永遠なる真理とその基体である魂について論じるプロティノスの思想 (『エネアデス』IV, 7, 12) により類似している。

16) 身体と魂の関係については『ソリロキア』II, 13, 23–24を参考にせよ。身体が基体であり、魂がそのうちにあるものであれば、魂は身体の死によって消滅するということになる。しかし『ソリロキア』のアウグスティヌスにとって魂は学問 (真理) と不可分離の関係であるが、身体とは不可分離の関係ではない。そのため魂は身体の死によって影響されない。

17) 『エネアデス』IV, 7, 12の「魂は永遠なる知識を所有しているので、自分自身も永遠であることを示しているのである」とプロティノスが言っていることは彼の魂不死論証を表しているが、これはプラトンの『メノン』における魂の先在に共通する思想を前提にしなければならない。中川純男の指摘のように、このことからプロティノスとアウグスティヌスの魂の不死論証の差異が明らかになる。(中川純男『存在と知：アウグスティヌス研究』、創文社、2000、191–192頁の注20を参考にせよ。)

18) 片柳栄一1995、『初期アウグスティヌス哲学の形成』、創文社、186–7頁。学問の現臨の場としての魂と神の

準となり、その輝く光を垣間見せ、いつも一つで不変のままに存在し続ける真理の全体像を (*totam faciem veritatis*) 十分に見極めるまで内的精神は探究を続けなければならない (II, 20, 35)。第四、このような探究の生を経て魂は身体が減びた後、真理の完全な直視による至福の生、永遠な生を迎えるようになるのである (II, 20, 36)。この一連のプロセスが魂に与えられた課題である。

4. 『ソリロクィア』の魂の不滅性論証における不明瞭さについて

上記で我々は『ソリロクィア』第2巻を中心とした、魂の不滅性論証の主な流れについて検討してみた。ところがこの魂の不滅性論証は、キリスト教の信仰をもっていない者であっても自己のうちに埋もれている学問的真理を探究さえすれば、真理を見ることができないかという思想が潜んでいるように考えられる。なぜそのように見えるかという、二つの理由のためである。一つは、信仰のようなキリスト教的事柄が『ソリロクィア』第2巻では強調されていないからである。もう一つはアウグスティヌスが、その論証の過程において主にプラトンの想起説やプロティノスの魂不死論などのギリシャ哲学を背景にしているということである。これらの理由のため、『ソリロクィア』第2巻の魂の不滅性論証は、一見キリスト教の枠を超えているような印象を与えているのである。

しかし『ソリロクィア』が一つのまとまった作品であり、その第1巻と第2巻は切り離されてはいけないとしたら、我々は第2巻の魂の不滅性論証がキリスト者のためであることを認めざるを得ない。なぜなら第1巻において、真理探究の対象になるのはキリスト教の神であり、その神的真理を直視し、知解するためには、肉体の汚れと事物に対する欲望から信仰によって清められた精神の目が必要とされるからである (I, 6, 12)¹⁹。またアウグスティヌス思想においてプラトンの想起説に代わるもの²⁰になる照明説²¹、つまり学問的真理が精神に見られるためには、神的真理によって照らされなければならない (I, 6, 12) というキリスト教的思想がすでに第1巻で強調されているからである²²。したがって、魂の不滅性論証の過程で現れる真理探究は、信仰によって清められ、神的光に照らされることを信じ

証明に関してはこの資料を参考にせよ。

- 19) より正確に言えば、信仰 (*fides*) とそれに付け加えられる希望 (*spes*)、愛 (*caritas*) (コリント上13, 13) が魂の視覚である理性に付き添うことによって魂は、身体すべての汚れから清められた精神・理性となり、それによって神への直視 (*visio Dei*) が得られ、至福な生はこのような直視に続くのである (I, 612 ~ 13)。
- 20) アウグスティヌスは、『再考録』I, 4, 3において、『ソリロクィア』のこの表現 (II, 20, 35) がプラトンの想起説 (『メノン』81E-86B, 『パイドン』72E) であると認め、その想起説を『三位一体』第12巻で論じられている神の照明説に修正する。
- 21) M. I. Bogan (tr.) 1968, *The Retractations* (The Fathers of the church, a new translation; v. 60), Washington: Catholic University of America Press, p. 19. M. I. Bogan は、『ソリロクィア』の不完全なところを修正する『再考録』(I, 4, 4)において、アウグスティヌスが自身の照明説をプラトンの想起説の代わりにしているところが目立つと注解している。
- 22) 片柳栄一1991, 「神探究の場の開示—アウグスティヌスの照明説再考—」『基督教学研究』(12), 23頁。片柳栄一によると、アウグスティヌスの照明説において、神的光の照明は人間の魂の *conversio* の原動力であり、人間の魂は不変の光に何らかの形で触れられている存在であり、神に呼びかけられている存在である。

て探究するキリスト者のためであると言えるであろう。

魂の不滅性論証において現れる真理探究がキリスト者のためであるなら、我々はアウグスティヌスの魂の不滅性論証におけるいくつかの不明瞭なところに気付くようになる。

第一、学問的真理の範囲や学門的真理の誤謬の可能性に関する不明瞭な点である。『ソリロクィア』の魂の不滅性論証において、魂の不滅性の根拠は、英知的・学問的真理が魂において埋もれていることによって、真理そのものである神が魂に見られることであるが、アウグスティヌスは学問的真理の範囲はどこまで広がるかについて、あるいは学問的真理としてみなされるものが誤謬である可能性については明確に議論していない。

第二、アウグスティヌスの魂の不死性論証における不明瞭さは、完了的不滅と未完了的不滅について明確に説明してくれないところにもある。つまり滅びない学問を宿している魂はすでに完了的不滅の存在であるに対して、真理そのものである神のところで永遠な至福の生²³⁾に与っていない魂は未完了的不滅の存在であるが、この完了的不滅と未完了的不滅という違いは明らかにされていない。

第三、アウグスティヌスの不滅性はギリシャ哲学とも、キリスト教的思想とも一致しないという問題も魂の不死性論証における不明瞭さとして指摘されうるであろう。学問的真理を宿することによってすでに完了的不滅の存在になったというアウグスティヌスの魂の不滅性は、魂の輪廻の教義に基づくプラトンとプロティノスの魂の不死性²⁴⁾と同じでなく、復活というキリストの出来事と救済史に根付いている永遠な生²⁵⁾を主張するキリスト教的思想からも遠ざかっているといえる。

第四、アウグスティヌスの魂の不滅性論証は、ギリシャ哲学の要素とキリスト教的要素を不自然に混合しているということである。魂の中に宿っている学問的真理の学びを通して、まだ未完了的不滅の生を目指すという探究の過程において、アウグスティヌスは、信仰によって清められた魂が神に呼びかけられることを強調する照明説を信じると同時に、忘却に埋もれている学問を学ぶことによって掘り返すというプラトン主義的想起説を用いてキリスト教の真理を探究しているのである。キリスト教的な要素とプラトン主義的要素が混合されていることは、我々を戸惑わせる不明瞭な点であるに違いない。

このようにアウグスティヌスの魂の不滅性論証の過程において、明らかになるこれらの不明瞭なと

23) 「至福なる神よ、至福なる者は皆、あなたの中に、あなたによって、あなたを通して至福である。」(Deus beatitudo, in quo et a quo et per quem beata sunt, quae beata sunt omnia.)(Soliloquia I, 1, 3)。『ソリロクィア』の全体の文脈からすると、至福は神的真理との関係において保証される魂の不死性を前提にしているといえる。J. A. Mourantによると、アウグスティヌスにとって至福は、魂を吹き込み、死者を復活させる創造者の神との関係によって完成され、保証される不死性を通して獲得されるものである。それに対してプラトン主義や新プラトン主義などのギリシャ哲学における魂の不死性の約束は、人間の最終的な目的である至福の生とその完成を確保するのに失敗した魂の輪廻 (metempsychosis) の教義によって、時間的で、倫理的な真の終局性 (finality) を欠いており、駄目になったという。(Cf. J. A. Mourant, op. cit., p. 2.)

24) 本研究の注の24参考にせよ。

25) O. Cullmann 1958, *Immortality of the soul or resurrection of the dead?: the witness of the New Testament*, London: Epworth Press, p. 17. O. Cullmannは、新約聖書の死と永遠な生はいつもキリストの出来事に密接に関わっているため、古代教会のキリスト者たちにとって、本質的に魂は不滅ではないことが明らかだという。

ころをどのように評価したらよからうか。P. De Labriolle²⁶⁾が指摘したように、おそらくキリスト教的思想にプラトンやプロティノスの思想を加え、自由に組織化することによって、自身の新しい思想を生み出したという点においては独創的な試みとして評価されるべきであろう。それに対して内なる自己への還帰と神への上昇というアグスティヌスの重要な真理探究の構造からすると、『ソリロキア』における魂の不死性は、数年後書かれた『真の宗教』(390-1)と『告白録』(397-400)においては魂の可死性(可変性²⁷⁾)へ変わる。つまり『ソリロキア』の執筆から約10年が経つ間、魂の不死性の強調は、魂の可死性や可変性の強調へと入れ替わることである。この側面からすると、『ソリロキア』における魂の不滅性に関するアグスティヌスの思想の不明瞭さは探究の挫折²⁸⁾として見られるかもしれない。

5. むすび

以上、本研究は『再考録』でアグスティヌスが認めた『ソリロキア』の魂の不死性論証の不完全さについて考察し、そのことの意義について述べた。結論として次のように本研究の議論をまとめる。

非場所的で不死的で真なるものである魂にとって、不滅の生とは、ただ存在しつづけ、生きつづけるだけではなく、真理を知解しつづけることによって、本当の至福の生を営むことである。アグスティヌスは、魂の不死性の根拠と魂が知解しつづけることができる根拠を魂の中で見つけた。言い換えれば忘却に埋もれている滅びない学問的真理が基体である魂の中で不可分離的に結ばれ、魂はその真理を掘り出し、その全貌を絶えず直視し、知解しなければならぬ宿命的課題を果たす結果として不滅の生が与えられると考えていた。ところがこの魂の不死性論証において、四つの不明瞭なところが明らかになる。一つは、魂に宿っている学問的真理の範囲をどこまですべきか、学問的真理の誤謬の可能性はありうるかという疑問における不明瞭さであり、もう一つは滅びない学問を宿している魂はすでに完了的な不滅の存在でありながら、同時にまだ永遠な至福の生には与っていないため未完的

26) Cf., P. De Labriolle, op. cit., pp. 20-21.

27) 『真の宗教』39, 72でアグスティヌスは内なる自己への帰還と神への上昇という探究を紹介する。そこで真理が宿っている内なる自己の中で、自己の可変的本性 (*natura mutabilis*) を見出し、神への上昇を行うことを薦める。『告白録』第13巻においては、内なる自己への帰還と神への上昇の探究として、人間存在において可変性を引き起こす「無形相的質料」という内面的淵に降りて、そこから創世記注解を通した魂の上昇の可能性を探る。このように『真の宗教』と『告白録』において不変の神への上昇は内的自己の可変性理解を通さなければならないが、ここでは『告白録』において不変・不滅の神の本姓に対する、可変的で可死的な人間の本性を表す言葉を次のように紹介する。commutabilis (可変の XIII, 16, 19), corrumpi (滅びる VII, 1, 1.), corruptibilis (滅びの VII, 4, 6.), finitus (有限の VII, 15, 21.), fluxus (流れる IV, 11, 16.), mutatio (変遷 VII, 1, 1.), mutabilis (変わりやすい VII, 3, 4, XII, 15, 18.), mutor (変わる XI, 4, 6.), violari (侵害される VII, 1, 1.), varior (変わる XI, 4, 6, XI, 31, 41.), violabilis (そこなわれる VII, 1, 1.)。

28) 金子晴勇は、アグスティヌスが魂の不滅性の論証に挫折した理由を、『ソリロキア』の続編である『魂の不滅』が未完の覚え書として終わったことにあるという。(金子晴勇1982, 『アグスティヌスの人間学』, 創文社, 22頁.)

不滅の存在でもあるという違いによって生じる不明瞭さである。さらに、アウグスティヌスの魂の不死性はギリシャ哲学のそれとも、キリスト教の永遠な生とも異なるというところからも不明瞭さが生じる。最後は、想起説のような哲学的要素と照明説というキリスト教的要素が不自然に混じっているということも魂の不死性論証における不明瞭さとして指摘されうる。これらの不明瞭な点は、見方によっては、新しい思想を生み出したという点においては独創的な試みとして評価されるが、その反対に魂の不死性の強調が数年後になると魂の可死性（可変性）の強調へ変わるという意味では探究の挫折として見られる。

486年カシキアムの山荘で小グループ隠棲生活の中で書き始めた『ソリロキア』のアウグスティヌスは、当時シンプリキアヌスのようなキリスト教プラトン主義たちの影響を受け、キリスト教の中で独創的な哲学の生活を行っていたが、『ソリロキア』における魂の不死性論証の不明瞭さは、そのような状況に起因するものであろう。